

心の宝

令和6年新年号

カンコウバイ
(和名・寒紅梅)

花言葉

高潔、忠実、忍耐

宗華法本顯

年回法要について

年回法要は、一周忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回忌・二十七回忌・三十三回忌・五十回忌・百回忌の順でおつとめします。

地方によっては、二十三回忌・二十七回忌の代わりに二十五回忌をつとめる所もあり、また、三十七回忌・四十三回忌・四十七回忌をつとめる地域もありますので、詳しくは菩提寺にお尋ねください。

新年を迎えるにあたり仏壇を清掃して、位牌等で回忌を確認し、回忌が分かったら早目に菩提寺に連絡して、年回法要をおつとめしましょう。

また、年回にかかわらず、毎年の祥月命日（亡くなった当日）には、大切に供養いたしましょう。



【令和六年 年回表】

回忌	年
一周忌	令和五年
三回忌	令和四年
七回忌	平成三十年
十三回忌	平成二十四年
十七回忌	平成二十年
二十三回忌	平成十四年
二十五回忌	平成十二年
二十七回忌	平成十年
三十三回忌	平成四年
三十七回忌	昭和六十三年
四十三回忌	昭和五十七年
四十七回忌	昭和五十三年
百回忌	大正十四年

信徒の心得

- 一、私たちの宗旨は顕本法華宗です
- 一、顕本法華宗の総本山は京都の妙満寺です
- 一、私たちは日蓮大聖人が定められた大曼荼羅を御本尊として篤く仏・法・僧の三宝さまに帰依します
- 一、私たちは妙法蓮華経と日蓮大聖人の御書を教えの拠り所とします
- 一、私たちはお釈迦さまを教主と仰ぎ日蓮大聖人を宗祖日什大正師を開祖として経巻相承を宗是とします
- 一、私たちはお釈迦さまの大慈大悲を信じて努めて菩薩の行を实践します

目次

年頭法話……………	2
新年のごあいさつ……………	4
まなびの時間……………	6
聖訓カレンダー……………	10
総本山妙満寺 第742回 宗祖日蓮大聖人報恩御会式……………	13
おつとめのお経一語一話……………	14
ぶらり寺々を訪ねて……………	16
住職からのまごころ一品……………	18
まちがい絵さがし……………	20
こちら編集局……………	21
宗門だより……………	22
本山だより……………	23
年賀広告……………	24

年頭法話

顯本法華宗管長 大川日仰
総本山妙満寺貫首



寿春

令和6年の輝かしい新春を迎え、謹んで全国各地の檀信徒の皆さま、ご清福を慶賀いたします。

さて、自坊寂光寺にある、先師が記された古い過去帳の「序文」に、次のような一文があります。

「それ父母を敬い、先祖を尊ぶは、仏家の要道にして人倫の大本たり。宗祖日蓮大聖人の報恩抄に「花は根にかへり、真味は土にとどまる」と訓へ給う。

根とは父母なり、土とは先祖なり。我が今日の生命は父母、先祖に受くるところ、ありがたきかなこの命、尊きかなこの人生。豈、報謝せざるべきや。

法味は方便品、寿量品、是好良薬の題目を以つて至極となす。これ顯本法華宗の教へなり。

故に必ず朝夕ご本尊を拝し、唱題読誦おこたることなかれ。但し、仏前の勤行にとどまらず、日常の生活に法華経の教へを活すこと、これ先祖への報恩なり。南無妙法蓮華経」

本宗では釈迦牟尼仏を教主とし、日蓮大聖人を宗祖、総本山妙満寺をお開きになられた日什大正師を開祖として、この「三聖」を仰ぎ尊び「経巻相承・直授日蓮（直受法水）」（法華経と日蓮大聖人の御書を教えの拠り所とする）を宗是として、布教伝道に励むことを目的としております。

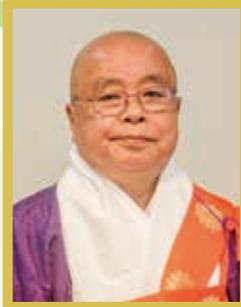
ご紹介させていただきました過去帳の「序文」にも記されているように、今年も本仏を尊び、お題目を唱え、ご先祖から受け継いでいる生命に感謝し、ご先祖供養のために、総本山妙満寺や菩提寺の行事に家族そろっておまいりいたしましょう。

「家族の絆いつまでも……」

南無妙法蓮華経 合掌

新年のごあいさつ

顕本法華宗 宗務総長 河野時巧



謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

相変わらずのコロナ禍にあり、また昨夏は猛暑日が連日続くなど、正に「地球沸騰」と言わざるをえない国内状況でありました。世界に目を転じましても、ロシアのウクライナ侵攻や、中東の情勢も緊張が高まっております、いずれも收拾のめども立っておりません。直接的・間接的に被害を受けておられる檀信徒の皆さまには、心からお見舞い申し上げます。

さて、元日には一年の安穩を願って、各家のご仏壇や菩提寺でお題目「南無妙法蓮華經」をお唱えされたことと存じます。

今年の日蓮大聖人が佐渡流罪をご赦免の後、文永11年(1274)5月17日、53歳の時より身延山に入山されて750年目になります。その後九カ年の間、大聖人は一度も山を下りられませんでした。身延山でのご生活は、祈り、修練、奉仕、懺悔、法悦、報恩の日々でありました。

そのお気持ちには、

立ちわたる身のうき雲も晴ぬべし

たえ(妙)ぬ御法の驚の山風

『身延山御書』

と御歌に詠まれています。

建治2年(1276)3月16日、師の道善房が遷化され、その訃報が大聖人の許に届きました。大聖人は『報恩抄』を著わされ、弟子に墓前にて転読するよう指示されました。

花は根にかへり真味は土にとどまる

此功德は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし

『報恩抄』

(咲いた花は元の根にかえり、果実の真味(まことの味)は土にとどまるように、日蓮が法華經に身命を捧げてきたその功德は、恩師道善御房の聖霊の御身に集まるであろう)

大聖人は一期の法華經弘通の功德を挙げて、師の菩提に手向けられています。この『報恩抄』結文の一節は、私たちの心に深く染み入り、強い感激を与えてくださっています。

また、弟子・信者へ宛てて書かれたたくさんのお手紙の中では、男女に差別なく、私たち一人ひとりの喜び、悲しみ、怒り、不安等にも寄り添ってくださっています。

どうぞ皆さま、法華經を受持し、日蓮大聖人に報恩感謝し、朝夕にお題目「南無妙法蓮華經」をお唱えいたしましょう。

南無妙法蓮華經

筆者の研究については、令和5年秋号「乾童院日乘上人にまなぶ」、令和2年春号「日蓮大聖人の御真蹟にふれて」と併せてお読みください。

えいししょういんにちかん

先師 永昌院日鑑上人にまなぶ

千葉県 茂原市 龍教寺住職
特命布教師

川崎英真



今回は数多き本宗の僧の中で、江戸末期にご活躍された永昌院日鑑上人(1806～1869)という先師から、学ばせていただきます。

日鑑上人の生い立ちを短くお話ししま

す。日鑑上人の字は通義といい、越前丹生郡真栗村(現在の福井市真栗町)の、父西野金三郎、母美恵子の子として生まれました。日鑑上人は10歳で福井県丹生郡越前町の善隆寺(法華宗真門流)皓充院日常上人の

弟子となり出家しました。日常上人は、その後、に広島市本照寺(顕本法華宗)の日常上人に帰依し、弟子となられ、本照寺十七世として住持されました。

天保6年、富山県 正顕寺

弘化元年春、福井市 妙経寺

弘化4年春、金沢市 本長寺

嘉永6年秋、大阪市 蓮成寺

安政4年夏、岡山市 本行寺

安政6年秋、京都市 寂光寺

また、日本各地で多くの人々の布教教化に尽力邁進され、明治2年(1869)12月8日に遷化されました。

日鑑上人も日常上人に就いて顕本法華宗に帰入し、13歳の時、福井県丹生郡越前町に近い福井市山内町の本行寺堅通院日領上人に仕えました。翌年より千葉県大網白里市の宮谷檀林に学び、文政6年に初めて千葉縣市原市久々津の本照寺住職となり、その後、以下の寺院を歴任されました。

文政11年春、千葉市 本円寺

天保2年冬、東京品川 本栄寺

天保4年秋、堺市 妙満寺

この間には、北陸で強い勢力のあった浄土真宗との宗論や、日蓮宗の大学者との本迹論争もありました。また、『法華経』の解釈、日蓮大聖人の御書の解釈、本尊論、総じて顕本法華宗の教義の根拠、他門との比較等について多数著されました(※文末に掲載)。後にこれら著作は、大阪蓮成寺の

篤信者山中良藏氏やまなかりゅうぞうによって多数施本されました。

これらの経歴や功労を見ただけでも、幕末の巨匠と称された理由が分かりますし、後進の我々は、日鑑上人の爪の垢を煎じて飲むつもりで精進せねばなりません…。

顕

本法華宗は、法華経全て一字一句、仏さまと思ひ大事にしていますが、法華経二十八品を前半(迹門しやくもん)と後半(本門ほんもん)とに分けた時に、迹門よりも本門が勝れていると考えます。

もう少し申し上げると、浅き(迹門)より深き(本門)に至る教義であつて、日常のお勤めでもこの順番が違えることはなく、如来寿量品第十六を読経してから方便品

布教教化に務めるのが我々顕本法華宗の僧侶の使命だと改めて思います。

また布教教化といっても、間違つた教えを伝えるのではなく、大聖人の正しい教えに基づいたお題目信仰の素晴らしさを、檀信徒にお伝えし続けなければなりません。そのためには日鑑上人のように正しい教学

第二を読経することはありません。詳細はまたの機会にお話ししますが、法華経解釈が違つと、お勤めの次第も各宗派で異なります。

時折、「お題目さえ唱えれば、どの宗派も皆一緒ですね」と言う方がおられます。表面的にはそう見えるのかもしれませんが。しかし宗教とはそのように安易なものではなく、釈尊や大聖人の本懐を理解し、今を生きる人たちが少しでも安心できる教義を大事にしています。日鑑上人は、これらをつかりやすくまとめくださつたわけです。

最

後に、日鑑上人の寺歴に倣なぞうならば、どの地域に行つても、どこの寺院に赴任しても縁ある人々を導き、寺門興隆じもんこうりゅうと

を理解し、学び続けなければならぬのです。そして、檀信徒の皆様は、菩提寺住職に教えていただいた教義を元にお題目をお唱えしていくことで、故人や先祖の供養だけではなく、日々の安寧にもつながっていくのです。

南無妙法蓮華経 合掌



写真：『心遂醒悟論』一巻

- ※『示正篇三巻』『破石集二巻』『内典孝経章』
一巻『本迹大国論』二巻『心遂醒悟論』一巻
『什師略伝記』一巻『会本門事即成疑難書』一巻
『弁正録』二巻『妙宗処中弁』二巻
『妙宗什門回向文略註』二巻『文底秘沈決』二巻
『断疑生信録』二巻『金剛亀羊弁』二巻
『本門顕要抄』二巻『三時感応弁』二巻
『本迹立正義』二巻『十二因縁抄』二巻
『迹以呂波歌』等